

MACF 礼拝説教要旨

2023年7月16日

「あなたに対する主イエスの求め」

ルカによる福音書 19章

28 イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。

29 そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲと

ベタニアに近づいたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、

30 言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。

31 もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と
言いなさい。」

32 使いに出された者たちが出かけて行くと、言われたとおりであった。

33 ろばの子をほどいていると、その持ち主たちが、「なぜ、子ろばをほどくのか」と
言った。

34 二人は、「主がお入り用なのです」と言った。

35 そして、子ろばをイエスのところに引いて来て、その上に自分の服をかけ、
イエスをお乗せした。

36 イエスが進んで行かれると、人々は自分の服を道に敷いた。

37 イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかれたとき、弟子の群れはこぞって、
自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。

38「主の名によって来られる方、王に、

祝福があるように。

天には平和、

いと高きところには栄光。」

39 すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、
「先生、お弟子たちを叱ってください」と言った。

40 イエスはお答えになった。「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、
石が叫び出す。」

イエス様が語った二つの言葉を考えたいと思います。

ひとつは「主がお入り用なのです」

もうひとつは「もし、この人たちが黙れば石が叫び出す」

このふたつとも、イエス様がご自分のことと関連させた言葉です。

1) 主がお入り用なのです。

向こうの村に行ってお子ろばを連れてくるように依頼するのですが
その時、「主がお入り用なのです」という言葉をまるで「合言葉」のように
使えと言うのです。

まもなく十字架を目前にしているイエス様が子ろばに乗ってエルサレムに上っていくと言うので
す。

旧約聖書の預言の中に新しい王がロバに乗って入城することが語られています。

ゼカリヤ書 9章9節に「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。」

見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者高ぶることなく、ろばに乗って来る雌ろばの子であるろばに乗って。」

ロバには背中に十字架のマークがあります。

とても象徴的ですが、これはイエス様にとって「重要な」出来事だと思えます。

これから十字架に向かおうとしているイエス様にとってロバの子に乗ってやってくることはメッセージを託していることでもありました。

そして、まさに「主がお入り用」なのですと言われたことの重さがわかります。主が十字架に向かうに及んで「主のメッセージを背中に書いているロバ」の存在はとても意味深いものです。

パウロはこう言いました。ガラテヤの信徒への手紙 6 章 14 節からしかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。

15 割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。

16 このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。

17 これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。

わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。

実は私たちにはキリストの焼印が付けられています。ロバの背中のように。

つまり、あなたに対してイエス様は「私はあなたを必要としています」とお語りになっています。

イエス様がロバに乗ってやってきたとき、ロバに注目し、ロバの名前を聞きたいと思った人はいなかったと思います。ロバは、イエス様の存在のなかに隠されてしまうのです。

私たちも同じです。イエス様は私たちをお用いになる時、私たちを主演にはなさらないのです。

主演はイエス様なのです。私たちの成功も失敗と立ち直りも、イエス様の愛、優しさが表される場となるなら、私たちは主に用いられたということになるでしょう。

「あの人の存在の中には、あの人自身の魅力を超えたなにかがある、だれかがいる」ということこそ主に用いられるということにつながるのだと思います。

自分の実力が、とか、自分の学力が、とか、自分の説教が人を救ったということが大事なのではなく、「イエス様がさまざまな場面で私のような存在を用いて主イエス様の祝福を分かち合わせ、届けてくださった」ということになると思います。

2) 石が叫ぶ

37 イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかれたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。

38「主の名によって来られる方、王に、
祝福があるように。
天には平和、
いと高きところには栄光。」

39 すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、
「先生、お弟子たちを叱ってください」と言った。
40 イエスはお答えになった。
「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」

音程が外れていたのか、それともやたらと声が大きかったのか、
ファリサイ派の人がやめさせるようにイエス様に言いました。
弟子たちは、本当に嬉しかったのでしょうか。やっと「時」が来たと感じていたのです。
でも、ファリサイ派の人たちは、それを嫌いました。
イエス様を讃える歌や歓声を好ましいとは思わなかったのです。
しかし、イエス様は「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」
と言われました。

「石の叫び」。

それは一般的には無理やり押さえつけられたり、自由を奪われたりしている
人々の中から沸き起こって来る、魂の叫びと考えることができるかもしれません。。
心の奥底からあふれ出てくる自由への叫びとも言えると思います。
つまり「黙らせることをしてはいけない」のです。
でも、この箇所では神様への賛美であり、礼拝の心です。
それを押し留めてはいけないというのです。

実は詩編には 96 編 11-13 節

11 天よ、喜び祝え、地よ、喜び躍れ
海とそこに満ちるものよ、とどろけ
12 野とそこにあるすべてのものよ、喜び勇め
森の木々よ、共に喜び歌え
13 主を迎えて。
詩編 98 編には
4 全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。
歓声をあげ、喜び歌い、ほめ歌え。
5 琴に合わせてほめ歌え
琴に合わせ、樂の音に合わせて。
6 ラッパを吹き、角笛を響かせて
王なる主の御前に喜びの叫びをあげよ。
7 とどろけ、海とそこに満ちるもの
世界とそこに住むものよ。
8 潮よ、手を打ち鳴らし
山々よ、共に喜び歌え

とあり、神様をほめたたえること、賛美すること
主なるお方への賞賛は止めてはいけないことなのです。
全地がそれをすでにしているのです。
聖書は「神様への礼拝」への招きにあふれています。
「賛美しよう」「ほめたたえよう」と招いています。
しかし人間はそれを抑えようとし、黙らせようとしているわけです。
だからイエス様は「もし、黙らせるなら石が叫ぶ」と語りました。

『石に叫ばせては』いけないのです。

もし、私たちがイエス様を「喜ばず、歓迎せず。讃えること」をしないとすれば
「石が叫ぶ」というわけです。

軍馬ではなく平和の象徴としてのロバの子にのってエルサレムへ入場しようとする
イエス様を群衆は歓迎し、神を讃美したのです。
人間の純粋な欲求である礼拝のこころ、神への讃美を黙らせることはできないのです。

「主がお入り用なのです。」

「言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」
これらの言葉はあなたの心に何を感じさせてくれるでしょう。

MACF 礼拝は <https://youtu.be/bMKuV6BGaOo>